

幼児と言葉

——「言葉かけ」の多様性（言葉のかけ方で子どもは変わる）——

福崎 紀章*

Toddlers and Words

—— Diversity of “Wording” (The Way You Put Words Changes Your Child) ——

Noriaki FUKUZAKI

Key words : 幼児 Infant, 乳児 Babies, 言葉 Language, 多様性 diversity, 保育 Conservation, 指導ポイント Study Point

I 緒言（はじめに）

近年の保育園・幼稚園の課題としては保育者の現場離れ、乳幼児の虐待問題、コロナ感染予防問題などがある。具体的には待機児童の解消、保育士の人材不足・潜在保育士の復職・保育士の職場環境の改善・保育士の精神的ケアの充実・ICTシステムの導入の推進と現場での活用などがある。これらの課題の背景には様々な要因が考えられている。その中の1つには保育者を目指す大学での学び方にも要因があるように考えられる。

大学では何を理解し、園児にどのような対応をすべきかを、ケースバイケースで、各場面の対応の相違の理解と実習が重要である。

本論考では、言葉の獲得に関する領域「言葉」を取り上げ、先行研究の事例をもとに、どのような対応がふさわしいか、保育者をめざす大学生、あるいは現場の保育者への指針になるような指導のポイントを示している。

幾多の素晴らしい先行研究が報告されているにもかかわらず、それらが身につけていなければ意味がない。少しでもそれを理解し実践できれば保育に携わる人の意義と喜びを感じることができよう。

そこでこの論考では、保育現場で迷わずよりよく対応できるように、何を理解し、どのように対応すべきかを考え、少しでも対応の多様性に気づき、自信をもって実践できるようにとの考えで進めた。事例の背景には、どんな重要な問題があるのか、どのように対応するのが適切なのか。実際に現場に出ないと分からないこともある

が、少しでも実践事例などをもとにして、事前にどのような言葉の対応をすべきかを習得していれば、園児への対応の仕方も変わってくる。これからの時代を共に生き抜くためには、保育士は「どのような言葉かけをして対応すべきか」、そしてそれが「どういう結果になるのか」を探求することとする。

II 研究の目的

「幼稚園教育要領（解説）」「保育所保育指針（解説）」（平成30年）をもとに、先行研究と本校 HBG 短期大学2年生の保育実習「言葉かけに関する実態調査」（2021年10月）を分析し、一般的に言われている現場からの生の声（園長、主任の先生方）も入れて考察したものである。「言葉一つで子どもは変わる」……保育者をめざす大学生、保育者が、子どもに寄り添った「言葉かけの多様性」について考えるきっかけになり、また実践の指針となることを目的としている。

III 仮説の提示

領域「言葉」は単独で捉えられるのではなく、5領域（①健康②人間関係③環境④言葉⑤表現）の密接な関わりの中で捉えるものである。

そこで何よりも具体的な事例に多く触れることと、事例から、「どのようなことが背景にあり、どんな言葉かけが適切なのか」つまり「視点を変えてみる」（視点を変えて子どもを理解する）と、子どもへの「言葉かけ」が変わってくる（言葉かけの多様性）ということである。子

* 広島文化学園短期大学保育学科（非常勤講師）

どもに寄り添って考えるとき、初めて「視点を変えてみる」という発想に気づくのである。それが子どもにかかる「言葉かけの多様化」であり、一律ではない。

保育をめざす学生が、このように考えていくことは実践の疑似体験となるため有意義である。やがて「保育要領」「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」などが説く内容の重要性に改めて気づき、そこから新たな保育者としての自覚と創造が生まれると考える。

Ⅳ 先行研究

石上浩美・矢野正は、「保育と言葉」(2013年)の中で、乳幼児期から児童期までの発達・教育心理学の基礎的な知見を踏まえて、学生向け・保育士向けの言葉の指導を取り上げ報告している。

赤木和重・岡村由紀子は『「気になる子と」と言わない保育』で、「こんなときどうする?」で分かりやすい実践例と対応の仕方を示し、「視点を変えると保育がどう変わるのか」また言葉を中心とした背景に、どのようなことが考えられるのかを、明らかにしている。「よくありそうな対応」「子どもの側から見てみると」「よくありそうな対応の気になる場所」「視点を変えるとこんな実践も」で、子どもに寄り添った方法と手立てが示されている。

これについては、分かりやすく項目ごとに分け、また縦横に比較検討できるように、簡略化してこちらで表に書き換えた。それが、後に掲載した表である。

また、大豆生田啓友・佐藤浩代は、「言葉の指導法」(2014年)の中で、大きく変わろうとしている社会変化の中で、保育内容は大変重要であるとしている。それは早くから英語教育を教えるということではなく、遊びや生活の中で、言葉の豊かな世界に出合っていくことは、生活の中の必然性、主体性、親しみの中で、感動を伴って行われることなのであると報告している。

そして、田上貞一郎は「保育者になるための国語表現」(2018年)の中で、保育者になるための基礎知識をふまえて会話表現(子どもや保護者、保育者同士)や文章表現(指導案、連絡帳、園だより)、演習問題を組み、自立した保育者になるための必要事項を取り上げている。

さらに古橋和夫は、「保育者のための言語表現の技術」2019年で、子どもとひらく児童文化財をもちいた保育実践を報告している。子どもの表現や言葉を豊かに育んでいくにはどうすればよいのかという課題のもとに、児童文化財に先達が込めた意味や子どもの言葉の発達、保育内容「言葉」とのかかわり、そして保育者の役割について述べている。

そこで本論考は、これらの先行研究の実践事例等を参考にしながら、保育をめざす大学生(及び保育者)への指導ポイントをより明確にすることを研究の目的とした。

保育者を育てるためにいくつかの先行研究とHBG短期大学保育学科2年生の実習における「言葉かけに関す

る実態調査」(子どもと接する際の言葉かけ)(2021年10月)を分析し、保育をめざす大学生(及び保育者)への指導ポイントを明らかにすることをねらいとしている。また大学生に伝えたい現場の保育者の生の声も取り上げた。

本論考の中心は幼児期(3歳児以上)であるが、乳児期(3歳児未満)との関連もあるため乳児期のことも含めている。

V 領域「言葉」のねらいと内容

1. 2017(平成29)年改訂(定)により、領域「言葉」のねらいは次のようになっている。「3歳児未満」と「3歳児以上」の加えられた部分は下線部、違いは波線部分

(1) 領域「言葉」のねらい

[経験したことや考えたことなどを自分なりの言葉で表現し、相手の話す言葉を聞こうとする意欲や態度を育て、言葉に対する感覚や言葉で表現する力を養う]

〈1歳以上3歳未満児〉(保育所保育指針)

- ①言葉遊びや言葉で表現する楽しさを感じる。
- ②人の言葉や話などを聞き、自分でも思ったことを伝えようとする。

③絵本や物語等親しむとともに言葉のやり取りを通じて身近な人と気持ちを合わせる。

〈3歳以上児〉(幼稚園教育要領)

- ①自分の気持ちを言葉で表現する楽しさを味わう。
- ②人の言葉や話などをよく聞き、自分の経験したことや考えたことを話し、伝え合う喜びを味わう。
- ③日常生活に必要な言葉が分かるようになるとともに、絵本や物語などに親しみ、言葉に対する感覚を豊かにし、先生や友達と心を通わせる。

2. 領域「言葉」の内容と改定の方向性

A 領域「言葉」の内容

〈1歳以上3歳未満児〉(保育所保育指針)

- ①保育士等の応答的な関わりや話しかけにより、自ら言葉を使おうとする。
- ②生活に必要な簡単な言葉に気づき、聞き分ける。
- ③親しみをもって日常の挨拶に応じる。
- ④絵本や紙芝居を楽しみ、簡単な言葉を繰り返したり、模倣したりして遊ぶ。
- ⑤保育士等とごっこ遊びをする中で、言葉のやり取りを楽しむ。
- ⑥保育士等の仲立ちとして、生活や遊びの中で友達との言葉のやり取りを楽しむ。
- ⑦保育士等や友達の言葉や話に興味や関心をもって、聞いたり、話したりする。

〈3歳以上児〉(幼稚園教育要領)

1歳児以上3歳児未満の①と⑤の下線部は、改定前に

もあったところ。次に示す波線部と比較すると、3歳以上児の方がよりレベルが上がっていることが分かる。

- (1) 先生や友達の話に興味や関心を持ち、親しみをもって聞いたり、話したりする。
- (2) したり、見たり、聞いたり、感じたり、考えたりなどしたことを自分なりに言葉で表現できる。
- (3) したいこと、してほしいことを言葉で表現したり、分からないことを尋ねたりする。
- (4) 人の話を注意して聞き、相手に分かるように話す。
- (5) 生活の中で必要な言葉が分かり、使う。
- (6) 親しみをもって日常の挨拶をする。
- (7) 生活の中で言葉の楽しさや美しさに気づく。
- (8) いろいろな体験を通じてイメージや言葉を豊かにする。
- (9) 絵本や物語などに親しみ、興味を持って聞き、想像する楽しさを味わう。
- (10) 日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう。

[内容の取扱い]

- (1) 言葉は、身近な人に親しみをもって接し、自分の感情や意思などを伝え、それに相手が応答し、その言葉を聞くことを通して次第に獲得していくことであることを考慮して、幼児が教師や他の幼児と関わることにより心を動かされるような体験をし、言葉を交わす喜びを味わえるようにすること。
- (2) 幼児が、自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意していくことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。
- (3) 絵本や物語などでその内容と自分の経験とを結び付けたり、想像を巡らせたりするなど、楽しみを十分に味わうことによって、次第に豊かなイメージを持ち、言葉に対する感覚が養われるようにすること。
- (4) 幼児の生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びなどをしたりすることを通して、言葉が豊かになるようにすること。
- (5) 幼児が日常生活の中で、文字などを使いながら思ったことをや考えたことを伝える喜びや楽しさを味わい、文字に対する興味や関心を持つようにすること。

B 教育要領の領域「言葉」にかかわる改定の方向性

1つ目は内容の取扱いに「(4) 幼児が生活の中で、言葉の響きやリズム、新しい言葉や表現などに触れ、これらを使う楽しさを味わえるようにすること。その際、絵本や物語に親しんだり、言葉遊びをしたりすることを通して、言葉を豊かにすること」が加えられた。

2つ目は、領域「言葉」領域として取り上げられては

いないが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿(10の姿)」が加えられた。その中には「(9) 言葉による伝え合い」がある。5歳児後半になると、ことばによる伝え合いを楽しむようになることや、保育者の援助、さらに小学校の生活や学習に、どのようにつながっていくのが示されている。

3つ目も、領域「言葉」ではないが、「指導計画の作成上の留意事項」に「(3) 言語活動の充実」が加えられた。

VI 各事例と指導のポイント

～事例は「保育と言葉」から要約引用～

3歳児未満の事例

1. 11か月「アツアツウツ」

ここでは11か月の乳児が、保育者のおやつを提供する前の様子が紹介されている。

「おやつを食べようね」と言って、ケーキを配膳した場面で発した音声である。「アツアツウツ」言葉の最初の喃語である。「おいしそうだね。ほーら、にんじんさんのケーキだよ。いただきます。」と言いながら手を合わせて言葉と動作で応じる。「アツアツ」と初めより大きい声で両手を合わせるような格好をする。「はいどうぞ」と保育者が声をかけ促すと、野菜ケーキを手でつかみ口へと運ぶ。「おいしいね、もぐもぐ」というと、パクパクと動かしている。

【指導のポイント】

乳児は喃語しか発生していないのに、保育者は、言葉で気持ちをくみとり、順序良く対応している。このように発達の過程を理解しておれば、言葉の発達も早くなる。

保育指針によると「身近な大人との関係の中で自分の意志や欲求を身振りなどでつたえようとし、大人から自分に向けられた言葉が分かるようになる」とあり発達過程では6か月～1歳3か月未満とある。

クーイングや喃語の真似など、保育者の相互に応答しあうような愛情深いコミュニケーションが、発語を生み出していくことが理解される。保育者の安心できる環境で丁寧に答えてもらえることで生まれる意欲が、言葉の世界を広げていくことになる。

(「HBG ぶんぶん広場」の写真：《資料3》参照)

学生に1日の中で、保育所で預かり返すまで、どのようなことがあるか、まず挙げてみる。

①預かるときの保育者の語り掛け「○○ちゃん、おはよう。待ってたよ。」

「みんなが○○ちゃんを待ってるよ。」など。

②ミルク(おやつ)を与えるとき

③絵本、紙芝居をみせるとき

④おもちゃなどで遊ぶとき

⑤昼寝をさせるとき

⑥おもつを交換するとき

⑦お誕生日会などをするとき

⑧保護者に渡すとき

これらに、行事が入ってくると限りなく、語りかける場面が出てくる。

次にどのような「言葉かけ」をするか、乳児の言葉の発達に大きく影響をしていく。場面を挙げて実際にどのような言葉かけをするか、ノートに書いて意見交換をする。

- ・「言葉かけ」が乳児にどのような影響を与えるか、考えてみる。

2. 1歳児「いないいないばあ」の事例

1歳5か月の乳児が、「いないいない……ばあ」が大好きで保育者に読んでもらっている。何度も読んで慣れてくると、「ばあ」のページで、「ばあ」というようになる。

繰り返しているいろんな種類のところからめくっても、「ばあ」と言うようになる。

保育者がエプロンや布、カーテンなどに隠れて、顔を出す「いないいないばあ」を繰り返しても、楽しんで「ばあ」と言うようになる。(「HBG ぶんぶん広場」の写真<資料3>参照)

【指導のポイント】

これは保育者の身振り(表現)、「いないいないばあ」の言葉の受け渡し、さらには「ばあ」という遊びを通して言葉を共有することになる。ここに保育者の顔の表情を変えるなど工夫することも考えられる。

- (1) 絵本に出てくる登場人物の顔や姿に扮装して物陰に隠れ、「いないいないばあ」をする。例えば「赤ずきんとおおかみ」などを考える。
- (2) 画用紙や段ボールや使って、顔の部分を作りぬき、「いないいないばあ」をするなどの工夫をする。

3. 2歳児「先生、みてーみてー」の事例

板棒のおもちゃを使って遊んでいる。「せんせい、みて、みて」と呼びながら、保育者の手を引っ張っていく。「わあ、長いなあ。線路みたいだね」と言うと、その子は嬉しそうに「せんろ、せんろ、ながいせんろ」と言っている。その隣では「みて、みて、おうち」と声を出している。「○○くん、いいおうちだね。先生も入れてほしいな。」と言うと、「うん、いいよ」と答える。

【指導のポイント】

- (1) 満2歳児を過ぎる頃から急速に語彙が増え、自分の意志や欲求を言葉で表すことができるようになる。個人差も出てくる時期である。「みて、みて」の言葉から伝わってくる子どもと保育者の関係は、信頼

関係で結ばれた絆で、温かさを感じる。この場で「線路みたいだね」とか、「いいおうちだね。先生も入れてほしいな」という言葉が、次の意欲と想像力、作る喜びへとつながっている。この対応ができる言葉かけに注意してほしい。自分だったら何とか様々な応答を考えてみる。

- (2) 日頃からこどもの興味関心に気づいておく必要がある。それによって言葉かけも変わってくる。保育者が子どもの心にどのようにして入っていくか、ここが鍵となる。

3歳児以上

4. 3歳児～4歳児「おんなじ、おんなじ」の事例

トイレから出てきた2人の女の子、パンツが同じキャラクターの絵が描かれているのに気づき、「おんなじ、おんなじ」と1人が言うと、相手も「おんなじ、おんなじ」と共鳴して言う。急に親近感が増し、仲間意識を持つ。

【指導のポイント】

2人で手をつなぎ「おんなじ、おんなじ」と声をそろえて歩いていく様子は、微笑ましい。このような喜びを保育士も共感できるようでありたい。

この頃になると、話し言葉の基礎ができ、興味や関心が高まる。同じ場所で同じような遊びをして楽しんでいるような場面が目立つ。

- (1) 平行遊び(同じ場所で同じような遊び)を見つけ、遊びを通してどのような会話をしているか、気を付けて聞いてみる。ブロック遊び、砂遊び、水遊び、鬼ごっこ、ブランコなどの遊具遊び、そこでどんな会話がされ、どんな共感ができているのかを考え調べてみる。
- (2) 遊びの中で、助け合ったり喜んでいたりしたときは、みんなで共有する場を利用して、成長を認め合うと良い。このような場面で、保育者と子どもの心がつながってくる。
- (3) 1人遊びをしている幼児については、遊びの様子やその時の気持を理解し、できるだけ声掛けをして関わり合いを多くとる。場合によっては、他の幼児と一緒にさせるなどの方法もあってよい。ただ本人の気持ちを汲み取っての声掛けが大切で、一方的にならないように留意する。

5. 4歳児「かわって」「だーめ」の事例

園ではよく耳にする言葉である。遊具の遊びで、「かわって」「だーめ」という言葉がよく行き通っている。園児が保育士に「先生、○○君がかわってくれない」という。遊具やおもちゃの取り合いっこである。放っておくと、けんかになり、一方が泣き始めることになる。そうなる前に保育者はどのようにかわったらよいのである

うか。「だーめ」と言ったときに、「〇〇君、△△君にかわってあげようね」と言うと、「だーめ、まだまだ、もうちょっと」と言ってかわろうとしない。「ずるい〇〇くん、ずるいよ」と言い出す。そこで保育者のとった態度は「どうしたらかわってくれるのかなあ。……〇〇君、数をかぞえようか。〇〇君、優しいからきっとかわってくれるよ」と提案し、数え歌を歌い始める。「1、2のさんまのしっぽ、ごりらのむすこ、……」△△くんと保育者が一緒に歌い始め、終わりに近づくと、〇〇君は足をつけはじめ、ブランコを止めた。保育者が〇〇君に「わあ、かわってくれてありがとう。やっぱり〇〇君はやさしいね。△△くん、うれしいね」△△は小さい声で「ありがとう」という。

【指導のポイント】

仲間とのけんかも増えてくるが、きまりの大切さにも気づき、守ろうとするようになる。感情も少しずつ抑えられ、我慢ができるようになってくる。

おおむね6歳ぐらいになってくると、思考力や認識力も高まり自然事象や社会事象、文字などへの興味、関心も深まっていく。

(1) ここではブランコの奪い合いで、数え歌を取り入れて、終わると交代というアイデアで、切り抜けている。数え歌はいろいろあるが、多く知っておいた方がよいだろう。歌は心も楽しませ、和やかにしてくれる要素がある。そして終わることによって、一定の時間が刻まれる。

数え歌には、ほかにどんなものがあるか、調べてみよう。

数え歌でなくても、人気アニメの歌などで「歌い終わったら、終了」という形式をとるのも一方法。

(2) 「ありがとう」「やさしいね」という相手への感謝と思いやりと、譲ってもらった方の気持ち「うれしいね」「ありがとう」の感謝を保育者が表現することによってお互いが育っていく土壌が生まれてくる。この言葉かけが、気持ちよく譲る気持ちと友達のことを思う優しい気持ちをつくる。譲ってもらった方も〇〇君への感謝の気持ちを抱くことになる。

(3) 他にどんな奪い合いの場面があるか考え、適切な対応を考えてみる。

6. 〈5歳児〉「ぼく一人で遊ばないといけない」の事例

「あーあ、明日はぼく一人で遊ばないといけない」母親が「どうして?」と聞くと「〇〇君がもうぼくと遊ばないって言ったんだもん」という。母親が「何か嫌なことを言ったりしたんじゃない?」と言うと、「してないもん。絶対遊ばないって言ったんだもん」と言い張る。

【指導のポイント】

- (1) このような場面で、どのようなアドバイスができるか考える。
- (2) 具体的な遊びや状況を、把握する。
- (3) 最初から最後まで、どんな言葉のやり取りがあったのかを把握する。次の日の
- (4) 実際は、翌日母親が「〇〇君と遊んだ?」と聞くと、「うん、遊んだよ。当たり前」の返事。この間、保育士からどのようなアドバイスがあり、心の変化が生じたのか想像してみる。

おおむね5歳では、「言葉により共通のイメージを持って遊んだり、目的に向かって集団で行動することが増える」「自分なりに考えて判断したり、批判する力が生まれ、けんかを自分たちで解決しようとするなど、お互いに相手を許したり、異なる思いや考えを認めたり、といった社会生活に必要な基本的な力を身につけていく」とされている。

集団の中での仲間意識、友達の長所短所も捉えるとともに、友達から見た自分への意識も芽生えてくる。したがって子どもたちの言葉のやり取りで、心の中で、何が芽生え育っているのかを考えていくことが大切になってくる。子供の心を豊かにしていくためには、話す意欲を押しさえるのではなく、引き出すようにしていくことが重要である。

7. 〈5歳児〉ごっこ遊びをする場面の事例

ままごと遊びで役割分担をし、それぞれがその人物になりきって、会話をする。「お母さん」「おねえちゃん」「バブちゃん(赤ちゃんのこと)」「ネコ」になり、それぞれのセリフを自由に語って会話する場面で、よく見る光景である。子供たちは、このような協働遊びを通して、社会の集団生活をまねし、あるいは自由につくり、言葉を獲得して行くのである。

【指導のポイント】

- (1) さまざまなごっこ遊びがある。ごっこ遊びの種類をできるだけ多く挙げてみる。
- (2) 考えられる園児たちのトラブルなどを挙げ、保育士として、どのような言葉かけができるかを話し合ってみる。
- (3) 園児たちの関わり合い、言葉のやり取りなどを注意深く観察し、良いところを発見し皆の前で褒め、成長の証としてみんなで拍手して喜ぶ。

8. 〈6歳児〉「おねえちゃんせんせいへ」

卒園を迎えた2月のある日、保育実習生が来た。〇〇さんは実習生に手書きを書いてきた。「おねえちゃんせんせい、いっぱいあそんでくれてありがとう。おねえちゃん

んせんせいのこと、〇〇はだいすきです。もうすぐいちねんせいになります。おねえちゃんせんせいもがんばってべんきょうしてください」と「おねえちゃんせんせいのかお」の絵が描かれた手紙であった。

【指導のポイント】

文字に興味を持つのは、おおむね6歳ごろになると「思考力や認識力も高まり、自然現象や社会現象、文字などの興味関心が深まっていく。」とある。

- (1) 実習時の「おねえちゃん先生」への挨拶やお手紙をどのように受け止めて、対応していくかなど、各自自分のこととして受け止め、返事を考える。
- (2) 実習での体験は貴重な体験である。何で困り考えさせられたか、みんなが共有できる場面を指導者はつくり、対応策を考えなければならない。もちろん、それがオールマイティーではないにしても、似たようなことは多くあり、多様な対応があることも知る必要がある。

〈領域「言葉」の内容と児童文化財をもちいた実践〉

～事例は「保育者のための言語表現の技術」から要約引用～

事例1 「しりとりに」4歳児

『ぶたたぬききつねねこ』（馬場のぼる著、こぐま社）絵本・しりとりのやり方に気づき、次を予想して言葉を発する。「あ、わかった。次は『ら』」

「ラッパかな」「やっぱりラッパだ」と言って喜ぶ。ページをめくって『と』では、「とまと」「とけい」「ともろこし」「トンカチ」など。しかし、予想は外れ「とんがりぼうし」とその絵を見て「えー」「ちがった」「とんがりぼうしだって」。ここで、言葉と絵が結びつき、新しい言葉を獲得していくことになる。

【指導のポイント】

このように絵本を見たりや言葉遊びをしたりすることを通して、言葉が豊かになってくる。また「ん」で始まる言葉はないことなども、ルールとして覚えていく。逆に「ん」のつく言葉を取り出して遊ぶ方法も考えられる。

- (1) 語彙が少ない幼児には、どのように対処して言ったらいいか考える。
絵と言葉、身振り、動作、音などを入れるのも、一つの方法。また、いくつかの絵の中から探すなどが考えられる。
- (2) ジェスチャーは友達同士でさせると、表現力、想像力もわいて個性的な楽しいものになるであろう。

事例2 「枯葉のバレエ」(4歳児)

秋の遠足で枯葉が舞う様子を見た〇〇は、「先生見て。はっぱがバレエしてる」と目を輝かせて言った。

【指導のポイント】

自然の美しさや不思議さに触れるような「感動的な体験」である。葉っぱが風に吹かれて舞っている様子をダンサーに見立てている比喩表現は、素晴らしい想像力である。仮に誰かから聞いた言葉だとしても、それを再話できることは、理解語彙としてだけでなく表現語彙として定着していると考えられる。

- (1) 幼児などが使うあるいは絵本などに出てくる擬音語、擬態語をできるだけ挙げ、それが何を表すか。(名詞、動詞)を考える。
- (2) 比喩表現ができるものは、比喩で表してみる。
- (3) 「〇〇君、帽子が枯葉だと思って、バレエしてみて？」
「〇〇さん、あとで、葉っぱになってバレエしてみる？」と返すのも、一つの方法。
- (4) 葉っぱや、根っこ、影絵などで想像できたことを表現してみる。

事例3 「心の天気予報」(5歳児)

5歳児の担任の先生は、降園時に「心の天気予報」として、太陽(晴れ)、雲(曇り)、傘(雨)のペープサートを作った。「今日の気持ちを発表したい人」と子どもたちに投げかけて発表させるのである。「楽しかったこと、嬉しかったこと、いい気持ち」は、晴れマーク。「なんだかよく分からない、つまらない、変だと思う」なら曇りマーク。「つまらない」「悲しい」「くやしい」などは雨マークとして、ペープサートを上げるのである。〇〇君が「プールに入って底にタッチしようとしたけど、何度やってもだめだった」というと、「わかる」「わたしも」と声を上げる。同じことをしても悔しいと感じる子どももいれば、そうでない子どももいる。相手に伝えたり、自分の考えをまとめるきっかけになったりしている。

【指導のポイント】

このことは小学校以上の教育で重視される言語活動の充実の中の、感性・情緒に係る言葉を理解することにつながる。教育要領に「言語活動の充実」が加えられたのは、幼児期からこのような体験(感情体験)が大切だからである。

- (1) ペープサートはお話や劇の時だけでなく、このような形で意思表示をさせることができる。自分の書いた絵で、笑顔、泣き顔、困った顔でもよい。この方法は、発言の自信がない子でもできる方法である。発展すれば「あのね、先生。今日こんなことがあったの。……」と言う風に言わせることもできる。配慮を要する場合は、教師がその子の話を聞いて、支援することも必要となる。
- (2) 実際にペープサートを作り、グループで体験してみる。

- (3) けんかななどの場合は、「仲良くなれるよ」とプラス思考にさせるよう指導する。
- (4) 友達への批判にならないように留意する。

事例4 「うんとこしょ、どっこいしょ」(5～6歳児)

声として発せられた音声の響きやリズムには、音としての楽しさやリズムがある。例えば「おおきなかぶ」に出てくる繰り返しの言葉「うんとこしょ、どっこいしょ」「まだまだかぶはぬけません」などはとても分かりやすく、劇にも取り入れられることが多い。聞くだけでなく皆で「うんとこしょ、どっこいしょ」を言い、これにピアノなどの曲が入って、動作などの振りがつくと、リズムをとりながら楽しく劇を演じることができる。

この物語は小学校低学年の教科書にも取り入れられている。

【指導のポイント】

- (1) お爺さん、お婆さん、孫、犬、猫、ネズミと役割分担して、それぞれのパートで声を出す。全員がそろったことで、やっと「かぶ」はぬける。この単純なストーリーの中には、重要な要素がいろいろ入っている。①大から小へ(小の存在の意味)②力の強いものから弱いものへ(強いものだけではぬけない)③みんなが力を合わせてこそ、実現できること(協力)④一番力の弱いネズミ(小さな力でも重要)が加わることによって、やっとぬける意味。(みんなが同じ仲間であることを、声を通してあるいは動作も入れて意識できることである。)
- (2) 遊びの中で、どんな場面が考えられるか。
- (3) 弱い立場の子どものことを考えて、入れてあげたり、ゆずったりする場面などの例を挙げる。

言葉は意味や内容を伝えるだけでなく、音声の響きやリズムに、音としての楽しさや美しさがあり、言葉を覚えていく幼児期は、言葉の音を持つ楽しさや美しさに気づくようになる。絵本・物語・詩はもちろん、保育者はこれらのことを理解するとともに、自分自身が使う言葉に、子どもたちが耳を傾けていくことにも意識することが大切である。保育者の言葉が、幼児の言葉や想像力に影響を与えてくるからである。

事例5 絵本の世界に浸る

子どもに人気のある絵本は、多く出版されている。「ぐりとぐら」「あなたをずっとあいしています」「やさしいライオン」「ロボットカミイ」など紹介されている。うれしい時にはみんなで歓声を上げ、悲しい時には、涙ぐむこともある。先生自身が絵本の世界に入り、声を詰まらす場面も出てくることもある。私が大人になって読んだ絵本に「かぜのでんわ」(いもとようこ)がある。東日本

大震災の津波で亡くなった人に、電話で語りかける「風邪の電話ボックス(線はつながっていない)」という実話をもとに作られた絵本である。テレビでも放送され有名な話である。また同じく震災で亡くなった母から手紙が届いたという本当にあった奇跡から生まれた絵本「かあさんのこもりうた」(作・こんのひとみ 絵・いもとようこ)もある。実話を知らなくても子どもたちには、十分に伝わる内容である。いつか実話を知ったとき、その絵本を改めて読み絵本の素晴らしさを味わうことであろう。そのほかたくさんさんの絵本が出版されている。

【指導のポイント】

絵本には、絵だけでなく言葉を添えて、心情に訴えるものが多い。幼児には幼児らしい絵本を用意しておくことが重要である。

- (1) 年齢別に絵本の種類や内容を把握しておく。
 - 〈乳幼児・幼児前期向けの絵本〉
 - ①生き物と出会う絵本②のりもの体験絵本③毎日のがたのしい絵本④むかしばなし絵本
 - 〈幼児中・後期向け絵本〉
 - ①創作物語の絵本 ②むかしむかしのお話 ③体験する科学・知識 ④幼年童話
- (2) 新しい絵本にも常に目を向け、よいものは紹介していく。
 - (保育者同士で共有していく)
 - ・毎年(毎月)新しく追加していく絵本を記入し一覧表を作ると良い。(本屋を利用)

《遊びの中の豊かな経験》

- (1) 電車や車を走らせる
 - ・擬音語、擬態語「ブーブー」「ガタンゴトン」中には駅構内アナウンスも入ることもある
 - (①数人でミニカー遊び②駐車場を見立てて、ミニカーを本棚に並べる。③電車のレールで遊ぶ)
- (2) モデルからはじまる「ごっこ遊び」
 - ①母親の姿はよく見ているため、ごっこ遊びに使われる。包丁で切ったものを、まな板から鍋に移す手つきは本物さながら、電子レンジを使い、携帯電話で話し、美顔器の顔の手入れもする。お化粧品やパソコンを使いこなす姿もよくまねる。発熱の子どもをお世話するなど、言葉も聞いているが、状況や音、手順等も驚くほどよく知っている。
 - このことから、身の回りの物品の名前、母親のしぐさ、保育者の動作から出てくるそれぞれの言葉は、子ども達にとっては、情報源である。テレビ、冷蔵庫、洗濯機、電子レンジ、エアコンなど多くの言葉が家庭に存在している。
 - 園や家で覚えた(知った)新しい言葉を毎日記録していくと、素晴らしい「言葉の成長記録」集ができる。

②幼稚園ごっこ

幼児も幼稚園ごっこや保育所ごっこでよく遊ぶ。モデルは身近な保育者であるので、保育者と同じ口調になったり、口癖まで似たりしてくる。絵本を読むときは、「今日はこの絵本を読みましょね」などの呼びかけなどがある。

③病院ごっこ

低年齢のうちは、人形を相手に、「お熱があるの」と寝かしつけたり、額に手を当てて布団をかけてあげるなど、人形が病気になった設定で看病することが多いようである。保育者が「大丈夫ですか」と声をかけると「まだ熱が下がらないんです」や「もう大丈夫です」が返ってくる。幼児になると、医師役や看護師、患者役になって、遊びが展開する。「どうしましたか」「おなか痛いんです」「じゃあ、お熱をはかりましょ」「注射をしましょ」時には「点滴をします」などの言葉も出てくるようである。

おもちゃ（小道具）としては、体温計、注射、薬袋、カルテなどが必要になるが周りの遊び道具で、ごっこ遊びの想像の世界で、言葉を育んでいる。

④電車ごっこ

椅子を縦に並べ、電車に見立て、「どこまで行きますか」「〇〇まで行きたいです」ブー（移動）「はい、つきました」「切符はここにに入れてください」「有難うございました」など。

中には、ロープを使って1人1人ひろい、その中に人が入って増えていく遊びもできる。このようにして、仲間意識をつくり集団で遊ぶ楽しさを、ごっこ遊びはつくることできる。

このように考えてくると、言葉の豊かさは、生活経験や環境が大きく影響していることが分かる。糸電話を利用して、電話ごっこなども考えられる。

(3) 仲間遊びの中で

「いれて」「いいよ」「かして」「どうぞ」

集団生活の中で、楽しくみんなで遊べるときはよいが、時には本当は「いれたくない」「かしたくない」時もあるはずである。そのような時に、「今、〇〇ちゃんと遊んでいるから、あとで遊ぼう。これがすんだら、遊ぶから」「じゃあ、3人で遊ぼうか」とか「これ使ったから、これは貸してあげるよ」など、相手の気持ちを考えて言えるようになる。遊びの世界には、子どもたちのルールもあるだろう。大切なことは、それぞれの子どもの背景を理解しておくことが重要である。

【指導のポイント】

自分の思いを言葉を通して伝えるとともに、相手にも思いや考えがあることを言葉を通して知る大事な時期で

もある。保育者としても、そのあたりをお互いに気づかせるような場面や言葉かけが、必要になってくると考える。また絵本や紙芝居、ペープサートなどを使って、子どもたちに考えさせることも1つの方法である。

絵本や紙芝居は絵・言葉はもちろん、音が入ることで、興味や関心を引き付けることができる。ペープサートを使う場合は、事前に鏡に写して動きはもちろん、表情や傾きなどが効果的に出ているかなども知ることができる。

(4) 砂場でみられる子どもの姿

穴を掘る、水を加えて泥状にする。山を作る、トンネルを掘る、水を流す、お団子やケーキを作る、板を渡して橋を作るなど、さまざまな遊びが見られる。お店屋さんは「いらっしゃい、お菓子や、ケーキがありますよ」「はい、100円です」お客の方は「ありがとう」といってお金を渡すふりをする。買い物状況を再現するのである。

これらも、保護者と買い物に行き、身に着けた言葉である。

【指導のポイント】

ダムづくりは、多くの水と砂が必要になり、みんなの協力が必要になってくる。目的を達成するためにはみんなが協力しないとできないこと、つまり、言葉による意思疎通が重要な役割を果たしている。

子供たちの遊びを通して、どんな方法で言葉かけ（賞賛や注意点など）をしたらよいかを考える。

(5) こどもの発想の怖さ

鬼ごっこの鬼が、ままごとの包丁をもち、刺された人が次の鬼になるという恐ろしい遊びが、卒園の前に行われていたことがあったと報告されている。女兒の興奮した騒ぎに保育者が気づき、すぐに止めたそうである。通常してはいけないことも、「遊びならいいかも」という気持ちなのか、「少し好奇心をあおる遊びを」と思ったのかよくわからないが、保育者が止めに入ったときは、男児が「いけない」と思って女兒から包丁を取り上げていたところであったという。この男児は、言葉ではなく、顔を真っ赤にして全身で止めていたという。

【指導のポイント】

- ①この後どのような指導を子どもたちにすべきか、考える。
- ②ままごとの包丁なら、人をさしてもけがをしないから、してもよいのか。
いけないなら、なぜそれはいけないのかを、子どもたちに考えさせる。
- ③人気の遊びに「警泥（泥警）」という遊びがある。（タッチしたらつかまる）これはしてもよい遊びかどうか、子どもたちに理由も考えさせる。

- ④子どもが、ごっこ遊びを好む理由を考える。
- ⑤こどもの言葉の育ちを保障する保育者の役割を考える。
- ⑥子どもが豊かな語り場を作るためには、保育者はどのような工夫が必要だろうか、例を挙げて書き出してみる。

〈文字に対する興味関心〉

1 生活の中で子どもの目に触れる文字

絵本、新聞、表札、住所表示、看板、公園名、遊び方、新聞、広告、店名、商品名など身の回りには多くの文字が存在している。乳幼児のころから、子ども向けのおもちゃや絵本に限らず、「生活の中に自分の興味関心のもてる対象を見つけている」ことを、保育者は気づき、またそのことを保護者にも積極的に発信する必要がある。幼児はそうして言葉に多く触れ、少しずつ言葉を獲得していくものである。

文字が言葉を表すものだと徐々にわかってくれば、名前が読めるだけでなく、書きたい場面も増えてくるであろう。3歳児ぐらいまでは書けないことを前提にしているが、4歳児ぐらいになると、自分で書きたい子どもも出てくる。

【指導のポイント】

- (1) 園児の内、どの程度文字（主に名前）が書けるのか把握する。
- (2) お手本があれば、書くことができる子ども、点線をなぞれば書くことができる子ども、書く気持ちがあるが手助けがいる子どもなど、様々である。個人差に応じた指導が必要である。
- (3) もし、3歳以上で自分の平かなの名前が読めない場合、どのような手立てで指導したらよいか考える。

本格的な文字の読み書き指導は、小学校に入ってからである。事前に読み書きできることに越したことはないが、変に癖字になっていると修正までに多くの時間を要する。幼児は、クレヨンやクレパスである程度書ければ、それでよいと考えられる。鉛筆の持ち方も小学校で指導するが、変な持ち方の習慣がついていると、なかなか治りにくい。

自発的な遊びの活動としては、「郵便ごっこ」「お医者さんごっこ」である。「郵便ごっこ」は暑中見舞いや、年賀状、郵便局の見学などがきっかけになることが多い。幼児にとって「自分のもの」はなかなか手に入れる機会が少ないが、相手のやり取りによっては、返事が返ってくることもある。

幼児によく見られるのは、鏡文字や書き順のちがいである。これらについては、まず幼児が「文字を書きたい」気持ちを優先すべきで温かく見守っていくことが重要である。

【指導のポイント】

- (1) 保育者ができることは、文字に困っている子供たちの援助や保育者宛に届いた手紙の返事を書くことである。手紙を配達する郵便屋さんをどうやって決めるかなども考えておくと活動的になる。「おたんじょうび、おめでとう」「ひなまつり」「こいのぼり」「たなばた」「まつり」「くりすます」「おしょうがつ」「あけまして おめでとう」「おとしだま」など
- (2) 「お医者さんごっこ」などの「ごっこ遊び」
ごっこ遊びは、名詞「びょういん」「おくすり」や動詞「ねつを はかりましょう」をはじめ、「ええ」「はい」「いいえ」などの感嘆詞などの言葉も自然に入ってくる。そこで一緒にまねて遊ぶことによって、理解語彙だけでなく使用できる表現語彙も増えていく。「ごっこ遊び」は、幼児同士の人間関係だけでなく、言葉を育てる場にもなっている。「ねつを はかりましょう」「〇〇がいたいんです」「ちゅうしゃを しましょう」「おくすりを のんでください」の言葉から、いろいろな動作も生まれてきます。
- (3) 小さいころに書き残した文字があれば、味わおう。
- (4) 文字に興味関心を促す活動には、どんなものがあるか、挙げてみよう。

絵本の表紙のタイトル、自分や友達の名前があるもの、おもちゃなどの名前（絵と一緒に）コーナーなど考えられるものを挙げる。

〈絵本がもたらす豊かな経験〉

『どろんこおおかみと7匹のこやぎ』柴田愛子作 おおきひろえ絵

この事例は、保育者にとって感動的な事例である。「言葉の指導法」（大豆生田 啓友・佐藤浩代 編著 p.147）引用して保育士を目指す学生や教師に届けたい。

〈絵本を基点にして広がる遊び〉

リンゴの木の4、5歳児が、「はたけ」と称しているひろっぱ（プレーパークのような空き地）で過ごしていた日のこと。一人の子が退屈しのぎのような顔をして、自分の手をカラーペンで白く塗っていた。そこで、「おまえは おおかみだろう！」と、私（保育士）が声をかけた。『おおかみと7匹のこやぎ』の台詞だ。

するとその周辺にいた子どもたちもキラ！と顔を輝かせて、近くにあった2階建ての小屋に飛び込んでいった。2階に立てこもった子どもたちを追いかけていき、「トン、トン、トン。あけておくれ おかあさんだよ」と私が言うと、中から「おかあさんは そんな がらごえじゃない。おまえは おおかみだろう！」と子どもたちの合唱。

「ばれてしまったか」と退散し、今度はやさしい声で「お母さんだよ あけておくれ」と言った。「てを みせ

てみる！」と子どもたち。そこで手を見せ、「ほんとうにおかさんよ。まっしろでしょう。あけておくれ」と言った。

絵本の話に沿って、自然と劇遊びになっていったのである。

ところが、中から「ワン ワン ワン ここにいるのは いぬです」というじゃありませんか。これはもちろんストーリーにはありません。ぎょっとした私は「いぬはうるさくてたまらん」と、ワンワン大合唱の中を階下に降りて行った。

1階の出入り口で靴を履こうとすると、なんと「めえー」とやぎの声。階段を登って引き返し「やっぱり やぎがいる」というと「ワンワン」。

こんなことが続き、やがて今度は「にゃー」と猫の音がするではありませんか。「ねこは まずくて食べねえ」と捨て台詞を言って階段を降りると「めえー」。またまた、登ると「にゃー」とくる。

何だか私が一人振り回されて、登ったり下りたりで疲れてしまった。いやになって「これ、もうやめる！疲れた！」と宣言し、外に出てハンモックでのんびりしていた。

子どもたちはぞろぞろ小屋から出てきた。ほかの遊びを始めたようだったので、私もやれやれと休憩。

ところがしばらくすると、二人の子が近づいてきた。「おおかみさん いいことがあるんです。いっしょにきてください」というじゃありませんか。まだ続き！でも、この猫などで声にはきくとよからぬことがあるに違いないので「なにかよくない感じがするから、いやです」と言ったのだが、腰を低くして、もっと猫などで声で「だいじょうぶです。なんにもありませんから どうぞ どうぞ」という。これは行かずにはおれないと覚悟した。目をつむって両手を引かれて進んでいく。

やっぱり！ なんと落とし穴にはめられた。中には水が入っていたのだからたまらない。周りで子どもたちは大喜び。大きな穴に落とされた私は、靴がぐちょぐちょ。「あーあ」と脱いで裸足になる。すると水と泥の具合がちょうどよく、いい感じなのだ。

「ここいいきもち」と言う「え？」と、子どもたちは次々と入ってきた。

やがて子どもたちはどんどん裸になり、泥だらけで遊ぶことになってしまった。まだ肌寒い季節だというのに。

【指導のポイント】

お話の世界に保育士と子どもたちがアレンジを加え、子どものストーリーをつくり出していった。

さらにお話の世界とは別の、実際の遊びが加えられ見事な展開となっている。保育士の柴田愛子さんは、この体験をそのまま絵本にされている。この展開にはお話を理解するだけでなく、子どもたちが言葉を利用して「お

おかみ」（保育者）を困らせようとしているところがポイントである。保育者が主役になるはずが、子どもたちに主役が移るのが面白い。ドキュメンタリーである。

- (1) 絵本がもたらす効果を遊びに生かし、さらに保育者と創造していく活動の素晴らしさと感動を学ぶ。
- (2) 子どもの成長は遊びの中でも育ち、保育者がどのように接することで生き生きとした展開になるか、子どもと保育者ともに、喜びが感じられる関わり方を考える。
- (3) 自分のお気に入りの本を30冊ぐらい、リストアップする。物語絵本、昔話絵本、赤ちゃん絵本、科学絵本、幼年童話等、様々なジャンルの絵本が入るよう意識しよう。（一覧表を作成し、精選して共有する）
- (4) その30冊ぐらいの絵本の中から子どもは個々の絵本から何を感じ取ることができるか（子どもの経験内容）を書き出してみよう。
- (5) 絵本を聞かせることの意味を書き出してみる。
- (6) 自分が魅力的な絵本をプレゼンできる資料を作成しよう。
- (7) 絵本から、子どもの活動がどのように生まれるか、絵本を1冊取り出して、子どもの遊びが生まれるような架空の事例を書き出す。（「どろんこおおかみと7匹のこやぎ」や「かぜのでんわ」など参考に）

Ⅶ HBG 短期大学保育学科2年生実習後の実態調査 （言葉かけ）

1 調査

- (1) 調査テーマ：「子どもと接する際の言葉かけについて」（幼稚園実習後）
- (2) 調査内容：子どもと接するとき、言葉かけを通してコミュニケーションを図ることが多いと思います。この度の幼稚園実習にいて、いろんな場面で言葉かけをしたことと思います。それについて、以下の項目について教えてください。
- (3) 調査項目：①何歳児 ②場面 ③言葉かけの内容と効果 ④さらに続けた言葉かけと効果

2 結果

①資料1（表）参照

②資料3（写真）参照

- ・「ぶんぶんひろば」（子ども子育て支援研究センター）令和元年6月「赤ちゃんふれあい体験」活動風景（写真）
- ・HBG「子ども・子育て支援研究センター年報」（2011年第1号～2020年第10号）より引用（コロナ感染拡大状況の中なので、2021年度は「ふれあい体験」は10月まで実施されていない。）

3 考察

場面では、様々な場面が出ている。「1人ぼっち、1人遊び」、「友達とけんか」「遊び仲間に入れない」「歌遊びに参加しない」「ごっこ遊びで、もめる」「遊びのルールを守らない」「準備・片づけが、さっさとできない」「運動会の練習がそろってできない（集団行動ができない）」「友達が一緒に遊んでくれない」などである。

学生の「最初の言葉かけ(1)」と子どもの「反応(1)」は、まずコミュニケーションの通路を作るきっかけになっており、「さらに続けた言葉かけ(2)」は、ほとんどが1回目より子どもに寄り添った言葉かけになっている。

中には「言葉かけ(3)(4)回め」が必要になってくる子どももいるが、子どもに寄り添った気持ちで対応し続けられれば、コミュニケーションは取れ、子どもにとって「あー、なるほど。分かった。よかった。」と思う1日になることも考えられる。

次に示すが、いつのお決まりのセリフでことがおさまるわけではない。その時その時に応じた、またその子どもの気持ちも汲み取りながら、「視点を変えた言葉かけ」が必要になってくることも考えられる。

いわゆる気になる子どもへの対応をどうするかという問題が起きてくる。

赤木和重 岡村由紀子は『『気になる子』と言わない保育』において「こんなときどうする？」で「考え方と手立て」を具体的に示している。そこで本の内容を要約抜粋し、表（一部改めたものも有る）にして分かりやすく簡単にまとめてみた。次のものがそれである。

Ⅷ 「気になる子」への対応の考え方と手立て (3歳以上)

①<資料2>「視点を変えてみる実践」

～「気になる子」と言わない保育より要約抜粋～
(<資料2>に表の形式で書き改めた)

今までの多くの実践は「よくありそうな対応」「よくありそうな気になるところ」の段階で終わっているのではないだろうか。その一歩先、「視点を変えてみたときの実践」は、この論文の主張する「言葉かけの多様性」に関わる重要なところである。

これからの保育のあり方を示す重要なものであると考える。

Ⅸ 現場からの生の声（園長、主任の先生方から）

Q1「実習生として学んでほしいこと」について

A 主任：社会人としての言葉遣いを身につけてほしい。
現場で学生気分のような会話では困る。

B 主任：挨拶や受け答えなどのマナーを守れるようにしてほしい。

C 園長：自分の考えを同僚や子どもたちに正しく伝え

る力を養ってほしい。

Q2「新任保育者の足りなかったこと」について

A 主任：子どもの様子、自分の対応を先輩保育者や保護者に伝える能力が足りなかった。

B 主任：保護者とコミュニケーションがうまくとれなかった。

C 園長：先輩保育者のアドバイスを素直に受け止め、自分を改めようという態度にかけていた。また、失敗をほかのことのせいにして、言い訳ばかりが目立った。

D 園長：自分の考えを、言葉で伝える力が足りなかった。

Q3「保護者との会話で足りなかったこと」について

B 主任：子どもの様子を伝えるだけでなく、保護者の悩みを聞く配慮がほしい。

D 園長：相性の良い保護者とはよく話すが、苦手な保護者には言葉かけをしようとしなない。

Q4「子どもとの対話で足りなかったこと」について

A 主任：必要以上に幼い言葉を使って話さない。子どもの年齢に合った言葉選びをしてほしい。幼児期における保育者の言葉遣いの影響は大きいので、正しい日本語で話してほしい。

B 主任：子どもにルールなどを説明するときは、分かりやすい言葉を選んでほしい。

C 園長：子どもの話を聞く余裕が足りない様子だった。

Q5「先輩保育者や同僚との会話で足りなかったこと」について

A 主任：自分1人でできることには限度があるので、上司や先輩に相談してほしい。できないことは、はっきり意思表示する必要がある。

B 主任：病気や怪我の子どもについては、同僚と情報を共有してほしい。

C 園長：先輩保育者に対して、今日の出来事を簡潔に報告する力が欠けていた。

Q6「連絡帳で工夫したこと、困ったこと」について

A 主任：幼稚園では、書く時間そのものの確保が難しい。

B 主任：保護者が送迎しない子どもの家庭には、なるべく詳しく書くようにした。年長になると読める子どもが増えるので、子どもにも読めるように配慮して書いた。

C 園長：病気などデリケートなことは、連絡帳に書かないで、電話で伝えるようにした。

また子どもの成長やクラスのエピソード、担任として嬉しかったことなどは保護者の反応がよかった。

Q7「園だより、クラスだよりで工夫したこと、困ったこと」について

A 主任：園長，主任保育者のチェックが入るので，時間に余裕をもって作成する必要がある。

デザインなどのセンスはすぐに身につかないので，参考資料を研究し感覚を養ってほしい。

B 主任：重要な連絡事項はマーカーでなぞって目立つようにした。よく忘れ物をする家庭は，別に電話で確認するようにした。

C 園長：園での遊びなど報告するとき，なぜその遊びが必要なのか専門的視点に立って説明するようにした。

D 園長：人気のあった給食のレシピを載せ，家庭で作れるようにした。精神的な悩みを持っている保護者に，コラム欄を設けて参考となる本やDVDを紹介するようにした。

Q8「その他のアドバイス」

D 園長：新任者に「忍耐強さ，明るさと感謝の気持ち，協調性」があれば，立派な保育者に育つと思う。保育に「正解」はなく，日々作り上げていく面がある。

～田上貞一郎「保育者になるための国語表現」
(萌文書林) p.17～18より

《これらを簡潔に項目にまとめると，新任者にとっての大切なことは》

- 1 基本的な日常のマナー（挨拶・受け答え）
- 2 言葉で正しく伝える力（子ども：年齢や個に合った言葉選び，言葉のかけ方・同僚・正しく分かりやすい日本語）
- 3 コミュニケーション（子どもに対して話を聞く余裕，保護者に対して悩みを聞く態度，同僚・先輩：連絡相談）
- 4 連絡帳（書く時間，子どもにも読める配慮，デリケートなことへの対応は電話）
- 5 園（クラス）だより（余裕をもって作成，忘れ物の多い子どもには電話）
- 6 新任者へ必要なこと（忍耐強さ・明るさ）

※領域「幼児と言葉」に関しての項目とそれ以前の「教師（保育者）として」の項目の声が出ている。

これらは基本的で重要なことであり，切り離して考えることはできない。

X 全体考察（子どもに寄り添った対応の「言葉かけ」）

保育者は，どのように子どもに寄り添った対応をすべきなのか，どのような視点で子どもを理解し対応していくのか，「言葉かけ」について考察する。

1 子どもの心を知ることから始まる。（「子どもに寄り添うのは」どこまで，どのように？）

- (1) まずはじめに「何してるの？」「どうしたの？」「どうしたいの？」の言葉をかける。
「だめだよ」「やめようね」「今は〇〇するときにしょ」のような大人の意図や願いを最初から伝えることは止める。「分かってくれるんだ」と思うような安心感を与える。
- (2) 反応がない時は「困っているの？」「なんだか分からないのかな？」の言葉をかける。
- (3) 表情や態度から子どもの心に届く言葉を探して，声をかけることも大切。
- (4) そして「嫌なんだね」「～してほしいんだね」と，抱きしめるような行為も大切。

2 子どもは，自ら変わる

- (1) 子ども自身が気づく言葉に多く出会わせる。
 - ①「ありがとう」の前に「うれしかったね」
 - ②「やさしいね」より「〇〇ちゃん，喜んでいるね」と言ったら，嬉しくなる。
 - ③食事をしっかり食べたら「えらいね」より「大きくなるね」と言ったら，自分の体に気づく。
 - ④子ども自身を認める「素敵ね」「素晴らしいね」の言葉かけで，自分の心が育つ。
- (2) 大きくなっていく自分に，誇りや自信を持つ言葉や行為と出会わせること。

小さな変化を「当たり前」にせず，「大きくなっているんだね」という言葉かけをする。

3 子どもがつながる

豊かな仲間関係の中で生活や遊びを経験するには，3つが大事。

- (1) 園を安心できる場所にする。
- (2) うれしいことも困ったことも，子どもとの関係の中で
 - ①大好きな人（友達）をつくる（どのように表現したら，好きになれるか一緒に考える）
 - ②トラブルは相手を知るチャンス

まず「どうしたかったの？」と両方に聞く。周りのお友達にも「どうしたのかなあ？」と聞き一緒に解決する。このことで仲間の思いや考えを知るだけでなく，トラブルがあったとき，どのように解決するのかを子どもたちは学んでいく。

また言葉でうまく伝えられない子どもには，「困っているのかな？」「うれしくなかった？」などの言葉を添え，その子どもの感情にぴったりの言葉を探すことで，自分の心に気づかせ，自分の気持ちを大切にすることを学べるようにする。

③できなくても人の世話をするのは，仲間への関心

「〇〇ちゃんは，お友達のお手伝いをしたんだね。素敵だね。今度は〇〇ちゃんが着替えるところを見せてね」

④「言いつけ」も仲間への関心

「あなたはどうしたいのかな?」「あなたは どう思ったのかな?」もし、やりたいということであれば、その心を支え、やれない事であれば「そう、気がついたんだね。素敵だね。それをお友達に教えてあげられるかな?」と伝える。

⑤「我慢」は、楽しい見通しのなかで

「順番を守らないとできないね。やれないね。」と声をかけがちだが「待っていたら〇〇がやれるね」「待っていたから〇〇がやれたんだね。うれしいね。よかったね。」と楽しい見通しのなかで声をかける。

(3) 保育士もクラスの仲間の1人

①こどもと一緒に保育をつくる。

②時には保育者も率直な感情表現を伝える。

保育者も「困っているんだよ」の言葉を伝えると、子どもなりに一緒に考える仲間になる。大人の弱さや失敗を見せることで、子どもとの関係が身近になる。

4 視点を変えて考える。保育仲間をつくってもっと変わる

(1) 「ない」から「たら」へ

「〇〇しないと遊べないよ」「〇〇しないとできないよ」という否定的な言い方を「〇〇したら遊ぼうね」「〇〇したらできるね」という肯定的な表現に変えるだけで、子どもの前向きな心が溢れてくる。視

点を変えて「かけ言葉」が変わることの重要性。

(2) 時間軸と空間軸を長くとる

ひとつの取り組みを長い時間の中で取り組む。何かの作品を作る場合、保育者の声掛けだけで、作ることができる子どももいれば、すぐにはできない子どももいる。しかし、じっくり時間をとれば後からできる子どももいれば、作品をじっくり考えて仕上げる子どももいる。時間と空間（場面や環境）の軸を長くとることで変わってくる。

(3) ありのままの自分を共感し合う

①思っていることを語り合う。

②子どもの素敵な姿を書き留め、語り合う。

③親たちに「おたより」にして伝える。

(4) 子どもを真ん中に語り合う場をつくる。

(5) 研修会や研究会へ参加し、実践の交流をする。

XI 結 論

「視点を変えて考えてみる」と、子どもへの「言葉かけ」が変わってくる（言葉かけの多様性）ということが、多くの事例より明らかになった。

「視点を変えた言葉かけ」で、子どもは「理解されているんだ」という安心感を持ち、肯定的な子どもの言動を導くことができることが明らかになった。

学生だけでなく既に就いている保育者にも伝えることが重要であると確信する。

《資料 1》

子どもと接する際の言葉かけ (HBG 短期大学2年) 2021年度アンケート実施 (10月)

〈3歳児〉

事例	場面	学生の最初の言葉かけ (1)	子どもの最初の反応 (1)	学生のさらに続けた言葉かけ (2)	子どものその後の反応 (2)
1	戸外から部屋に入るとき	「お部屋入る?じゃあ、先生と競争して入ろうか?」	うん! よういどん!	「足、速いね!」	・喜んでいた。
2	片づけを、なかなか始めないところ	「〇〇君、お片付けの時間だよ。」	「いやだ、まだ遊びたいんだもん」といって片づけ始めようとしない。	「じゃあ、ここまでやったら片づけようか」納得いくまで遊ぶ。	・終わったら自ら片づけ始める。
3	子ども同士のけんか	「何があったの?」	「〇〇ちゃんが、おもちゃ貸してくれん!」とはおぼてている。	「〇〇ちゃんが、おもちゃ使いたいだって。もう1回貸してって言ってごらん。」と仲介する。	「貸して!」と自分の口で言い、おもちゃを貸してもらう。
4	子ども4人で誰が先生(実習生)と手をつなぐかで、けんかが起きた。	「ちょっと待って、お友達を叫いたらいけないよ。何があったのかな?」	「私が先生と手をつなぐ」「ほくもつなぎたい」「いやだ、私が手をつなぐ」と子ども同士で口論が起きる困った状況。	「じゃあ、遊具に行くまで〇〇ちゃんと、〇〇君と先生で手をつなごう!お帰りのチャイムで靴箱の所まで帰るときは、△△ちゃんと、△△くんと先生で順番で手をつなぐというのは、どうかな?」	順番に手をつなぐことができると知って、安心してけんかがおさまる。
5	「履かせて!」1人で靴が履けなくて泣く	「大丈夫。泣かんでいいよ。できる、できる!」	「できない!」といって泣き出す。	「泣かんのよ。先生も一緒に手伝う。やってみて。」	「うん」とうなずき、自分で靴を履き始める。
6	おもちゃを持って一人でポーとしている	「何してるん?」と声をかけたり、おもちゃを渡したりした。	何も反応してくれなかったけれど、おもちゃは受け取ってくれた。	「それすごいね!何を作ったの?」	だんだん心を開いて、何を作ったか、作り方など話してくれるようになった。
7	集団で遊んでいるところに入れず、1人でした。	「誰かと遊びたいの?みんなと遊ぶ?」	「遊びたいけど入れない」と困ったように言う。	「先生と一緒に行ってみようか!」	「うん!」と嬉しそうに答える。

〈4歳児〉

事例	場面	学生の最初の言葉かけ (1)	子どもの最初の反応 (1)	学生のさらに続けた言葉かけ (2)	子どものその後の反応 (2)
8	・子ども同士が喧嘩をしている。 ・子どもが1人ぼっちでいる。様子を見ながら声掛けをする。	・「何してるの?」 ・泣いている。	質問してくれて、自分から話す姿が見えた。	・子どもに寄り添うことにより、子どもが心を開いた。 ・「どうしたの?」「～だったね」と受けとめる。	子どもに寄り添うことにより、子どもが心を開いた。
9	一緒に遊びたい様子で立っている。	「一緒に遊ぼうよ!」	「いやだ!〇〇ちゃんとは、遊びたくない!」	「先生と遊ぼうか?」	遊んでいくうちに、理由を話してくれた。
10	自分でできること(靴を履くなど)を、甘えて「やって」と言ってくるとき	「〇〇君、自分でできるよね?」	「できーん!」と甘える。	「〇〇君のかわいいところみたいー」	自分でできるところまで頑張っている様子が見られた。
11	他の子どもが色水をしているのを見ているとき	「〇〇ちゃんはやらないの?」	「私はやらない」などの困った状況	「じゃ、みんなが使うお花を取りに行かない?」	「うん!」と喜んで、お花をとっていた。
12	1人の子が遊び仲間に入りたいたのに、入れなくて1人ぼっちでいるところ	「何で入れてあげないの?」	「いやだ。〇〇ちゃんは入れたくない」	「〇〇君が入れなかったら、どう思うかね?」と聞く。	しばらくして、「はいっていいよ!」と言って、楽しく遊んだ。
13	子どもが1人でブランコをしているところ	「〇〇君も一緒に砂遊びする?」	「いや!これがいい!」	「え?じゃあ、ブランコがすんだらおいで。」	「うん、いいよ!」しばらくして、一緒に砂遊びを始める。
14	昼食(給食)が嫌で、教室の後ろで、うろうろしていた。	「今日は、お母さんが作ってくれたお弁当の日じゃない?お母さん、どんなお弁当を作ってくれたかな?」	給食ではなく、お弁当であることに気づき、嬉しそうに準備を始める。	「お弁当って、好きなものいっぱい入っているから、嬉しーいよ。」と促す。	恥ずかしそうな笑顔が見え始める。
15	歌遊びに参加しようとしないうち	「どうしたん?みんなと一緒に、やろ?」	椅子から立ち上がらず、みんなの様子を見ているままで、参加しない。	「じゃ、先生と一緒に踊ろっか!」と言って誘い、大きな動作で楽しんで踊ったり、他の園児たちと歌遊びを楽しむ様子を見せたりする。	自分もやってみたいという気持ちが出てきて、少しずつ動いたり、歌ったりしようとする姿が見られた。

事例	場面	学生の最初の言葉かけ (1)	子どもの最初の反応 (1)	学生のさらに続けた言葉かけ (2)	子どものその後の反応 (2)
16	子どもが喧嘩をしているところ	「ブロック投げたら、危ないでしょ。自分がやられたらどんな気持ち？」	「嫌な気持ち……」	「5歳になったら、そんな事せんよ」	わだかまりが、残る。
17	子どもが喧嘩をしているところ	「何があったの？」	出来事を話す。	「嫌だったね。〇〇ちゃんは、どうしたかったの？」	どうしてほしかったかを話して、落ち着いて友達に話しかける。
18	・ごっこ遊び ・山を作る ・かけっこでもめている	・「手伝ってあげる」 ・「よいい、ドン！」	「一緒に遊ぶよ」	・「先生も走ろっと！」	一緒になってそのまま遊んだ。
19	準備をしていない子ども	「準備をするんだよ。」	何のことか分からない様子	準備は「〇〇と△△をするんだよ。」	具体的にいうことで、今すべきことを理解する。
20	荷物の片づけをせずに、他の友達が遊んでいるのを見ているところ。	「片付けしよう！」	まだ、遊びが気になっている様子	「〇〇ちゃんの、お片付け上手なところ、見せて！」	「分かった！見てて！」と言いながら、片づけを始める。

〈5歳児〉

事例	場面	学生の最初の言葉かけ (1)	子どもの最初の反応 (1)	学生のさらに続けた言葉かけ (2)	子どものその後の反応 (2)
25	・他の子どもと遊んでいるときに、遊びに誘って来る子どもがいる。	「〇分後に遊ぼうね。すぐだよ。」	だだをこねる。	「〇〇君、がまんしてくれる？」	・ぼくは我慢できるよ。 ・ぼくも我慢する。
26	運動会のマーチングの練習中疲れて練習ができなくなってしまったところ	「お父さんお母さんに、かっこいいところを見てもうらんじゃないん？もうやめる？こういうところみてもうらん？」	首を振って立ち上がる。	「去年のひまわり組さん(年長)みたいにかっこよく頑張ろうや。みんながかっこよく演奏しとるの見たいなー。できるの知っとるんよ！」	やる気が出て、自ら練習に取り組む。
27	鬼ごっこでタッチされ捕まっても、逃げ続ける。	「タッチされてないの？」と問いかける。「(タッチされたでしょ)とは言わない」	うそをつかずに、「されたよ」と答える。	「すぐ助けに行くから、ろうやで待っててね」と言う。	走ってろうやに向かう。
28	お昼寝の後、布団を持って立っている。	「どうしたん？みんなトイレに行ったり遊んだりしてよ？」	ずっと黙っている。	「一緒に布団片づけようか！」	「何もしていないのに、布団が濡れたー」と、話し始める。
29	朝の支度をなかなか始めない。	「時計を見て。朝の会がはじまるよ！」	「始まらないもん」と言って遊び始める。	「先生と一緒に支度しようよ。最初は何をするんだった？」(朝の支度の順番が書かれた表を見せる)	表を見ながら順番に支度を始める。
30	グループに分かれての製作に参加せず、1人で製作をする。	「1人で作っているの？みんなと一緒にやらない？」	「まだ作っているの」と誘いを断る。	「先生のお手伝いをしてくれない？ここに新聞を貼ってほしいな。」	持っていたものを置いて手伝いをしてくれる。徐々にグループの輪に入り友達と製作をする。
31	鬼ごっこをしていて、ずっと鬼役の子がいた。	「がんばれー！速い速い！」	「先生、あっち行って！」と鬼役の子どもが、はぶてる。	「わかった。向こうからかっこいい所、見とくね。」	やる気になって、自力で他の子どもをタッチできた。
32	鼓笛隊の練習なのに座っているところ。	「先生、〇〇君のかっこいいところ見たいなあ。」	立ち上がって頑張る。	「かっこよくできたね。」	笑顔が見えた。
33	子どもが半泣き。	「どうしたの？なんかあったの？」	「〇〇と一緒に遊んでくれない」「だって〇〇が勝手に入ってきたもん。」など、喧嘩の始まり。	「どうしたら仲良く遊べるかね？」	だんだん落ち着いてきて、どうしたらいいか話し始める。
34	集団行動が苦手に参加せず遊びまわっている子がいる。	「みんな、かっこいいよ。〇〇君もかっこいい所見せてよ。」	「いやだ、やりたくない。」	・その遊び〇回やったら、戻ろう。 ・しつこく戻ろうと言わず、少しの間、見守る。	・「やらない」と、そのまま続ける。 ・「うん、わかった。やる！」
35	子どもが自分のところに来て何か言いたそうにする。	「どうしたん？〇〇君、一緒にあそぶ？」	何か伝えたい感じ。	「お友達と何かあった？先生に、お話しできそう？」	嫌だったことを自分に伝え始めた。
36	朝の会をしている時、じっと座ることができず寝そべって、ごろごろしていた。	「先生、お話ししているよ。椅子に座って見ない？」	「ん～？」 あまり聞いていない様子。	「じゃ、長い針があそまで行くまで頑張ってみよう？〇〇君がかっこよく座っているところが見たいんよ。」	「ん～」と、少し考えつつ、ちょっとだけ椅子に座って、朝の会をした。

37	嫌なことがあり、1人で端にいる。丸まって寝転んでいる。	「どうしたの？」	「嫌なことばかりだから、遊びたくない。」	・「遊ぼう！」 ・「落ち着いたら先生と一緒に遊ぼう！今は1人が良いよね！また何かあったら言ってね」と言って離れる。	・「いやだ。」 ・「うーん、分かった。」と言い、時間がたつと1人で遊び始めた。
38	遊びをみんなで決める。(喧嘩をしないように見守っていた)	「どうする？」	「じゃんけんで決めよ！」	「喧嘩をせずに決めよ。」	「次はこの遊びしようね。」
39	友達と喧嘩をしている時	「どうしたの？」	「おもちゃを貸してくれない！」	「今はお友達が使っていて、1つしかないから、次の遊ぶ時に貸してもらおう？」	「うん、分かった」と言い、他の遊びをする。

〈3・4・5歳児〉

事例	場面	学生の最初の言葉かけ (1)	子どもの最初の反応 (1)	学生のさらに続けた言葉かけ (2)	子どものその後の反応 (2)
21	1人で何もしていない	「何して遊ぶ？」	ゲームを持ってきて「これで遊ぶ」と伝えてくれた。	「一緒にやろうか。」	「うん！」 一緒に遊んだ。
22	年長全員で宝探しをしているところ	「何してるの？」	「宝探ししてる！」	「いいね。楽しそうだね。」	「先生も一緒にしよう！」 一緒に宝探しをする。
23	・3～4歳児：朝の準備をしているところ ・4～5歳児：お弁当のひもが結べないでいるところ	・3～4歳児：「朝の準備をするよ！」 ・4～5歳児：「待っているだけじゃなくて、言わないと分からないよ」	・3～4歳児：他のことに興味をもち、なかなか準備をしない。 ・4～5歳児：先生の所へ行き、「結べないので手伝ってください」と伝える。	・3～4歳児：身支度カードを見せながら、「次はシールを貼るよー」 ・4～5歳児：「次からは、ちゃんと伝えられるようにね。」	・3～4歳児：カードを見ながら、朝の準備を始め、シールを貼る。 ・4～5歳児：「はい！」と答えて、結んでもらったお礼を伝える。
24	・教室の隅にいる子ども ・遊びに入りたそうにしている子ども	・「一緒に遊ぶ？」 ・「こっち、おいで！」 「一緒に遊ぼう？」	・3～4歳児：他のことに興味をもち、なかなか準備をしない。 ・近くに来る。 ・一緒に遊ぶことができる。	「ブロックや、おままごともあるよ」	・ブロックを使って遊ぶ。 ・ままごともする。

《資料 2》 視点を変えてみる実践

幼児保育「言葉かけの多様性」(視点を変えると、考え方や手立ても変わってくる)

～『『気になる子』と言わない保育』より(3歳以上)表にして要約抜粋～

事例年齢	場面	よくありそうな対応	子どもの側から見てみると	よくありそうな対応の 気になるところ	視点を変えてみたときの実践
事例① 4歳	話を聞かなければならぬ場面がよくしゃべる。 ・しゃべりたい気持ちを、我慢できないか？ ・場の雰囲気がかかっていないのかな？	・「おやくそく表」を作って視覚的具体的にルールを掲示する。 ・毎日決まった時間に1対1で話を聞く。 ・「話す人マイク」を使い、話す人が誰であるかを明確にする。	・「ほくもしゃべりたい。今しゃべりたい」 ・「先生ばかり、しゃべる時間があるの？」 ・みんなもしゃべりたい、きいてもらいたい。	・「ルールを守ろう」という子どもの気持ちがあるかどうか。 ・「困ったときは1対1」その子どもはもちろん、他の子どもにとっても、お互いのことを思いやって行く姿は引き出せない。 ・マイクは良く薦められるが、困った場面は、実は集団をつくり、それぞれの個人の内面を豊かにする場面でもある。	・「おさんぼ、どこにここかな？」で目的地の話し合い。 ・突然まさと君がテレビのヒーローの話をしたとき ・「そうか、強いんだね〇〇は。でも今お散歩どこへ行くのか決めているから、終わったらお話ししてくね。まさとちゃん、カエル好き？(まさとは好きでカエルと遊んでいる)」 ・「大好き！」 ・今度のおさんぼは、お弁当をもって川沿いを歩き、花も摘んでカエルのいるところに決まりました。
<p>〈指導のポイント〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しみがあると我慢ができる。(「今からおさんぼ、どこにするか決めるから集まろうね」) ・共感が安心を生む。(子どもの発した言葉に顔したり目を合わせたりすると、子どもはその場所を安心に変える) ・隣に大好きな子どもがいると安心できる。(気持ちが落ち着く、お互い理解しあう) 					
事例② 4歳	テンションが上がってしまって動きが止まらない ・感情の抑制ができないのかな？ ・先生の指示を忘れてしまうのかな？	・いったん、B君を静かな別室に移し、興奮を鎮める。 ・活動を始める前に「お約束」をする。(椅子に座って歌いましょう) ・静かになる目印をつくる。	・静止しなければいけないのはどんな時なの？(もう少し待ってみる) ・「それくらい楽しいんだね」「そのくらいびっくりしたんだね」(その気持ちを受け止めたい)	・他の子どもは連れていかれるB君を見て、どう思っているでしょうか。(特別な子ども、何か違う子ども) ・納得のプロセスを欠いて「約束」と言っても子ども自ら守ろうとする気持ちは芽生えないのでは。 ・目印の人数に静かにさせるだけでなく、子ども自身が、自分の気持ちや体を自分で調整できる姿を引き出すことが重要。	・歌を歌う場面で、「はしれはしれ(かぜのこどもたち)」に決まるが、けんたは走り回る。「けんたくん、どうしたのかな」と他の子どもたちに、投げかける。「トナカイさんになって、サンタさん連れてきたのかな。」するとみんなが「そり」を歌おうと言う。けんたも走るのを止め、一緒に歌う。
<p>〈指導のポイント〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの本当の気持ちをつかむ。 ・個の動きと集団の動きをつなぐ。 ・たくさんのお話をプレゼント(「うれしくなっちゃったんだね。でも今大事なんだ」と抱きしめて行動を止めることも考えられる) ・見えにくい心を、分かろうとする仲間……温かいクラス 					
事例③ 5歳	活動の切り替えが悪い ・見通しがついていないのかな？ ・活動の始まりや終わりが分かかっていないのかな？	・いつまで遊ぶのかを予め伝える。(「6の針になったら、電車遊びはおしまいです」「鈴が鳴ったら、お母さんをお迎えに来ます」) ・お母さんにお迎えに来てもらう時間の調整をする。	・「そりゃ、楽しいんだもんねえ」 ・「あー楽しかった」と思えるほど遊べてる。	・忙しい中では難しいが、本人の決めた終わりを信じて待つことも、大人の課題かもしれない。 ・時間の概念は年長から。それ以前に導入すれば、気持ちや行動が時間に縛られるようになりかねない。 ・保育のあり方を工夫してもなお難しい場合の「緊急措置」であり、保育の質に問題があることを自覚しなくてはならない。	「終わりにする」という言い方ではなく、「続きにする」という言い方を。親の迎えがあるまで牛乳パック工作で船ごっこを2人でしている。他の子どもは、絵本の読み聞かせをする。終わったときに、「きたよー」と戻ってくる。「今度と一緒に読めるといいねー」「そうそう、一緒に見ようよ。」と他の子どもたち。
<p>〈指導のポイント〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分の中で切り替える力を養う：「どうしたら終わりにできるか？」を尋ねて、自分でおしまいにできることを大切に。 ・仲間気持ち伝える→次につながる行動を生むことになる。 ・仲間の中で折り合いをつける。「先に〇〇しているから、終わったら来てね」子ども同士で折り合いをつける力を育てる。 					
事例④ 5歳	次の活動にスムーズに参加できない。 ・見通しがはっきりしないため、動けない。 ・活動の内容が分かかっていない。	・予定表を壁に張ろう。(次の活動が見えるようにする)「C君、終わりますよ」「12の針になったら電車の遊びは終わりです。」 ・次の活動が始まる少し前に「個別予告」をする。次の活動を提示する。	・この状況で困っているのは誰？ ・設定場面は、今全員が参加しなければならぬもの？ ・「こっちの方が面白い！」 ・本当に気になれば、ちらっと気にする瞬間があるはず。 ・子どもには自分で折り合いをつける、力をつけたい。	・「予定表」「個別予告」「次の活動の提示」すべてに共通しているのは、保育者の都合で遊びを切り替えようとしていること。 ・自分たちで切り替えたいと思いや、充実して締めくくれる実感をつくりだすことが重要。	・「砂遊びは面白くてたまらない」……続きにするで納得。 ・「わかったよ。でもね。お昼食べたら体の中に悪い病気がないか、調べてもらうんだよ。みんなは調べてもらうからいいけど、さとし君はどう？」「えー？いやー。先生と行く」「先生は仕事がいっぱいでいけないんだよ。ごめんね」「じゃ、やめる」「続きにする？壊さないで。」「うん、そうする。」
<p>〈指導のポイント〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもの心に付き合う。(「一緒に共有する時間」を作る) ・こどもの心を信頼する。「子どもの遊び世界の終了時」を一緒に見つけ出す。 ・1人とみんなをつなぐ。「あと1つなんだって」(クラスとの共有関係を作る) ・周りの子どもが切り替える姿を見ることは、子ども自身の中に「見通し」の多用な姿を知ることになる。 					

事例年齢	場面	よくありそうな対応	子どもの側から見てみると	よくありそうな対応の気になるところ	視点を変えてみたときの実践
事例⑤ 5歳	いつもちょっとゆっくりになる。 ・手順が覚えられないのかな。 ・言語理解がよくないので、指示が理解できないか？	・個別に保育者がついて、具体的に指示を出す。「次は〇〇始まるよ。」 ・事前に手遊びや歌などを練習する。 ・無理に一緒に求めないようにする。	・「ゆっくりだけど、やりたいよ。」 (やりたい気持ちまで、なくさないでほしい。)	・個別につくことが丁寧な配慮となる一方で、他の子どもたちとのつながりが、なくなる可能性もある。 ・無理に一緒に求めないが、「放置」にもならないように注意する。みんなが対等に楽しめるような保育を作るの方が重要である。	ぼくも一緒にできたよ。 子ども同士の教えあいが一番。 ・子どもの本当の気持ちをつかむ。 ・そばに大好きな友達がいるようにする。
<p>(指導のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本当の気持ちをつかむ その子どもが、ただ周りの流れについて行っているのか、楽しくてやっているのに困っているのかを把握する。 ・そばに大好きなお友達がいると、安心して気持ちを出しやすい。 					
事例⑥ 4歳	自分の世界に入っ て、なかなか抜け出 せない。 ・ファンタジーに入 る、こだわりの1つ (動物園)では？ ・想像と現実の世界 の区別がついていな いのか？	・活動の区切りを明確 にしよう。 ・「今、何をすること か」を明確にしよう。 ・メリハリを大切に しよう。	・自分の世界が面白 くなかったら、入れ ない。現実を面白 くすれば、こだわ りがなくなる。 ・保育は参加するも の？(みんなで、 つくって広がって いくからもしろ いのでは) ・どんな動物園な かH君の世界に 入っていく。	左の「よくありそうな対応」の3つ に共通するのは、子どもに対し「1 人の世界はダメ」と言うメッセージ を向けているところ。	「ごはんたべたら はいります」 「暑いねあゆむ君、お友達はプール に入る支度をしているけど、プール どうする？」「ごはん(ままごと) ができたら入るよ。」 あゆむ君の見えるところで体操をす る。あゆむ君のごちそうづくりをみ んなに伝えると、「いいね」と言っ て後でいただくことにする。プール が終わり次第、みんなは、食事(ま まごと)をした後、今度はあゆむ君 とみんながプールに入り楽しそうに 遊ぶ。
<p>(指導のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・楽しいからこそ心 ・1人の楽しさを共感へ ・1人ほっちにさせない：保育者はお互いを「見えやすく」する工夫が必要である。表面的に違っていても、仲間なんだという心が育つから。 					
事例⑦ 4歳	勝ちや一番にこだわ る。 ・「1番でないとい けない」というこ だわり？ ・負けることが許せ ないのかな？	・事前に負けること があることを伝え る。 ・事前に「じゃんけ んは何回まで」「何 時まで」を伝える。	・「負けちゃった。 くやしい！」 ・「けんかじゃない よ？」 ・結果ばかりにとら われなないで。	・「頑張ってたの、知ってるよ！」 ・「負けちゃったんだ、次がんばる よ。」 ・「負ける時もあるよね」と折り合 いを付ける。 ・「負けただけでもう一度頑張ってみ よう」と立ち上がる気もちが生ま れる。	・「勝ち」や「1番」が大すぎな んだ！ (悔しさの折り合いをつけるため に) ・のぶおが後から遊びに来て、並ん でいる子の一番前に来る。「のぶ お君ずるい」、すると「うるせー」 ・保育者が来て、「のぶお君ここ に入ってもいいって聞いたの？」 「聞いてない」「じゃ、聞いてみ るよ。みんないいの？イヤな時 は、嫌と言っていていいんだよ。」 すると「イヤ！」の声。 ・のぶおは寝転がって怒り始める。 傍らにいて悔しかった気持ちに 共感しながら、泣き止むのを待 つ。落ち着いたところで、「すこ いね。友代の言うこと分かった んだ、のぶおちゃん素敵だね。」 (みんなの前で言う)
<p>(指導のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・やりたかった心・やれない心の共感を。強い口調で叱責するのは、子どもの心に届かない。 ・分かってくれる大好きな保育者の言動で子どもは少しずつ我慢をする力を育てる。我慢したことをみんなの前で讃めること。 ・育ち合う仲間の力：「おかしきことはおかしきよ」「イヤなことはイヤ」と言える力を育てる。 					
事例⑧ 5歳	謝るのだけれど、気 持ちはこもっていな い。 ・相手の気持ちが分 からないのかな？ ・泣いている子への 対処が分からないか ？	・友達が泣いている 時、どう行動すれ ばよいか考える。 保育者と呼んだり、 「どうしたの？」 と尋ねたりする。 ・友達の気持ちを分 かりやすく説明す る。	・誰の何のための 「ごめんさい」 なのか。 ・おやつを配り忘れ たから？泣いたか ら？ ・5歳なら(年長な ので)自分でいえ る。(あるいは周り の子どもが言う)	・T君だけが謝って、本人や周りが 状況を知らせてないことが問題。 ・「わたしのおやつくださーい！」 ・「T君、T君、麻衣ちゃんのおやつ ないよー！」	聞けばいいんだよ。「ありますか？」 と。 ・「しんじ君、おやつないよ。持っ てきてといえる？、困ったとき はお口で言うんだよ。言える？」 ・持ってきてもらう。 ・「当番さんはどうしたらいいの かなー？」 ・「聞けばいいんだよ、ありますかっ て？」
<p>(指導のポイント)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・行動の後ろにある子どもの心に目を向ける。 ・失敗の中で学ぶ。(経験を通すことで「言葉と気持ち」が結びつく) ・かけがえのない仲間関係と安心するクラスづくり 					

事例年齢	場面	よくありそうな対応	子どもの側から見てみると	よくありそうな対応の気になるところ	視点を変えてみたときの実践
事例⑨ 4歳	おとなしく感情が見えにくい。 ・言葉を出さずきか けがつかめない？ ・親子関係に問題が あるのかも？	・「楽しいね」と言 葉を添える。 ・必要以上に注意を しない。 ・親子関係を探る。	・安心できる場にな ってる。 ・言葉や生活の力が 育っていても、気 持ちは……？ ・お友達との中で は？	・保育者が「楽しいね」と声を積 極的に声をかけ、Yちゃんの内面 を感じる事が重要。 ・Yちゃんに求められるのは注意し ないことではなく、安心できる関 係や時間を保障することである。 ・生活を知ること、あくまで保育 を見直すためのものであり、親 子関係の改善を求めるものでは ない。	「いっぱい入れちゃったよ」（キャ！ は、やりたいサイン） 玉入れに「わー、いっぱい入ってき たね。ボールみんな入れちゃおう か？あさみちゃんも、入れて！」 「あさみちゃん、あそこにもボー ルがあるよ」急いで取りに行くが プールの中で慌てたせいか転び立ち上 がる。「うわああ！あさみちゃん、かっ こいいね！」というと、「キャッ！」 「あさみいっぱい入れちゃった」と いい顔。何回も何回も楽しんで いた。
<p>〈指導のポイント〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・見えにくい子どもの感情をつかむ。 ・興味関心を育てる遊び ・子ども心をつかむ働きかけをする。 ・ホッとする人、ホッとする場所をつくる。 					
事例⑩ 3歳	水が苦手なプールや 水遊びを怖がる。 ・感覚過敏のため、 濡れることが嫌な のかな？	・無理に誘いかけ ず、徐々に慣れる ように。 ・ご褒美を用意す る。 （「プールのあと は、好きなおも ちゃで遊ぼう」 プールに入る気持 ちを少しでも高め る。）	「怖いものは怖い！」 ・「大嫌い」から 「ちょっと嫌い」 「そんな嫌なもの でもないかも」と いう風になれたら いい。 ・嫌なものを乗り越 えるには、好きな お友達がいて、 「やってみたいな」 「ああんりたいな あ」と思えるよ うな憧れが必要。	・水を怖がる気持ちをどこまで理解 しているか。水に慣れさせられ たという強制感につながらない ように。 ・ご褒美を用意することのすべてを 否定するわけではないが、プー ルそのものの魅力を保育者は伝 えることができているのでは ないだろうか。	プール前はダンゴムシおどり（体 操）（好きな遊びで） ・ダンゴムシに夢中になって遊んで いるりょう君に、好きな「ダン ゴムシ」を利用して、プール前 にダンゴムシ体操（おどり）と 名付けて体操をする。そして プールの水遊びを楽しくし、遊 びと生活仲間が一緒になるよ うにする。
<p>〈指導のポイント〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その子の気に入った遊びを十分にさせ、遊び仲間をつくる。（遊び仲間がつながると、安心感が生まれ、違った遊びや苦手な遊びにも目を向けることができる） ・ゆっくり、じっくり（その場所・そこにいる大人や子どもに「安心感」を育てることで新しい遊びへの挑戦が生まれる。） ・違った遊びが見える「水で楽しそうに遊ぶ」その姿を見るだけでなく、声、雰囲気、音なども心を動かす環境である。 					
事例⑪ 4歳	偏食が強く、限ら れたものしか食べ ない。 ・味覚が過敏だから かな？ ・お母さん、ちょ っと甘やかしている のかな？	・保護者と連携し、 食べられるものを 増やす。 ・無理はさせないよ うに。 ・シールを用意し よう。	・「ほくのこと、分 かってくれてるの かな」 ・年少だということ を意識してほしい。 ついこの間まで家 庭の料理だった。 ・D君は登園時から どんな風に過ご しているのか、ク ラスで安心して過 せているのだから か、周りの子ども たちも心配する。	・「食べたくない」という子どもの 思いを受け止めつつも、生活リ ズムを整えたり、食事内容を工 夫したり、友達関係を育てる中 で「自分も食べてみようかな」 という思いを育てることが重要。 ・シール保育では保育の質が高ま らず、むしろ貧しくしていくこ ともなり得るので注意。	「嫌いなんだ！おかず、でも……友 達を見て食べてみようかな？」（3 歳児） ・①なめるだけ②1口だけで、少 ずつ慣れることを大事にする。 ・子どもの意志を大事にしなが ら、子どもの関係や遊びの中で育 つ食への意欲を大事にする。お かずを食べないでつやに「てっ ちゃん、これおいしいよ、みん な食べちゃった。」（せいじ） ・「え、おいしいの？……ほんとだ ね、おいしいね」 ・「食べれたね。先生も一緒に食べ よ。おいしい。」みんな一緒に食 べる。 ・その後でつやは、おかずをどん どん食べるようになった。
<p>〈指導のポイント〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・個人差を配慮して、声掛けをする。 ・仲間の中で、共に育つ。 ・保育者の熱い心……「食べさせたい」「なんでも食べられる子に」と保育者の強い思いで接することが、返って子どもに苦しみを生むことを、保育者は知ることが大事。 					

事例年齢	場面	よくありそうな対応	子どもの側から見てみると	よくありそうな対応の気になるところ	視点を変えてみたときの実践
事例⑫ 5歳	「○○ちゃんだけずるい！」 ・アレルギー体質 ・知的障害と自閉症 ・Aちゃんのお野菜を抜く理由が伝わっていなかったのかな？	<ul style="list-style-type: none"> ・Aちゃんは、ずるくないことをみんなに伝える。 ・Aちゃんは、体が悪いのでお野菜が食べられないことを説明。 ・班のメンバーを予め考慮する。 ・野菜の嫌いな子どもは、「食べなくても構わない」とする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「食べないのかな？食べられないのかな？」 ・「Aちゃんが皆と違うということについて、分かっている？」 ・子どもたちが「どうして？」と率直に話し合える雰囲気になっていたのか。 ・「ずるい」と言う言葉から、まだ納得していないことが分かる。 	<p>「ずるい」と言ったことをきっかけにして、子どもたちがお互いの気持ちを認めながら、同じように頑張っている存在だと気づくような保育をつくること。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・「違いを知ったら仲間だね」 ・Aちゃん：5歳児でアレルギー体質 ・B君：食べられるものが少ない ・「○○ちゃんは卵が食べれないんだよ」（絵本や、うちの人からも聞いている） ・「B君は食べられないのです。舌は苦しい苦しいと言うんだよ」
<p>〈指導のポイント〉</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもに関心があるからこそ「ずるい」と言う。（「ずるい」という言葉は、人間関係があるから出る言葉） ・「子ども心」を知る。（原因が一人ひとり違うので、その場面に応じて違いを確認する。） ・食べられない子どもの心：「食べられない」のか「食べない」のかを見極める。 ・子どもたちの中で：大人対子ども、1対1の関係ではなく、周りの仲間がいる環境で指導する。 					

《資料 3》 「ぶんぶん ひろば」(子ども・子育て支援研究センター)



いないいないばあっ!



このおもちゃ?何だろう?ひとりでに動いていく。



はい、どうぞ!ありがとう!



はい、コロコロコロ!こっちへ転がしてごらん
じょうず、じょうず!



保育士や保護者から、子育てについて話を聞く



首がすわっていない赤ちゃんを、横抱き抱っこをして
表情を読み取る



ハイハイを促す、「おいで、こっち！」



大型絵本と音楽を利用した実践



紙芝居に近寄って来る子ども



「おいで、おいで」……歩けた！



絵合わせ……「どれとどれが一緒かな」



言葉かけで、手形が花や蝶、クラッカーになる

参考文献（引用文献）

- 古橋和夫 編著「保育者のための言語表現の技術」2019年4月1日第2版（萌文書林）
- 石上浩美・矢野 正 編著「保育と言葉」2020年9月10日第2版（嵯峨野書院）
- いもとようこ 作絵「かぜのでんわ」2014年10月（金の星社）
- 大豆生田啓友・佐藤浩代 編著「言葉の指導法」2020年5月（玉川大学出版部）改訂第2版
- 「幼稚園教育要領解説」平成30年3月（文部科学省）
- 「保育所保育指針解説」平成30年3月（厚生労働省）
- 「幼保認定こども園教育・保育要領解説」平成30年3月内閣府・文部科学省・厚生労働省
- 幼稚園採用試験研究会編「2021年度 幼稚園・幼保連携型認定こども園 教員採用試験問題200選」（大阪教育図書）
- 無藤 隆 監修「幼稚園要領ハンドブック」2017年9月（学研）
- 無藤 隆 監修・宮里暁美編者代表「領域 言葉」2021年4月（萌文書林）
- 田上貞一郎 編著「保育者になるための国語表現」2018年3月（萌文書林）
- 赤木和重・岡村由紀子 編著「『気になる子』と合わない保育」ひとなる書房 2013年8月
- 加藤繁美 著「記録を書く人書けない人」ひとなる書房 2014年8月
- 安曇幸子・伊野 緑・吉田裕子・田代康子 編著「子どもとつながる 子どもがつながる」ひとなる書房
- 秋田喜代美・野口隆子 編著「保育内容 言葉」光生館 2014年3月
- 内閣府「幼保連携型認定こども園教育・保育要領・幼稚園教育要領・保育所保育指針原本」2014年10月（チャイルド本社）
- 齋藤政子・石田健太郎・西垣美穂子・井上宏子 編著「実習」新読書社 2020年10月
- 汐見稔幸・大豆生田啓友「保育論者」（新しい保育講座）ミネルヴァ書房 2018年4月
- 広島文化学園「子ども・子育て支援研究センター年報」（2011年第1号～2020年第10号）

Summary

Based on many cases of previous research and experiences in practical training, “infants and words” are considered. The points of the guidance to the university student are clarified.